

田
中
十
九
三

悠

田中十九三

悠

句集 悠 参百部限定版奥附

昭和六十三年十二月一日発行

著 者 田 中 十 九 三

埼玉県川口市朝日一―一―二七
電話〇四八二(二二)三二八四

印 刷 所 亀田印刷株式会社

埼玉県川口市本町三―六―九

領 価 四、〇〇〇円

句集・悠・目次

作品

第一章

1

第二章

65

第三章

129

第四章

193

第五章

257

第六章

321

既刊句集

388

第一章

枯野にも夕焼けの空ありにけり
枯れきつて面売りの空残りけり
象の耳黙つていれば凍てるかも
ひつそりと枯野の色となる晩年
海鳴りの空の一隅冬銀河
枯色は兵の色なりお曼陀羅
枯れきつてしまえば只の女かな
街の灯が消えて北風ばかりかな
着ぶくれていても夢なお失わず
海鳴りは無縁枯れゆく芒原
ポケットに何も無けれど冬銀河
藁塚が過去のひとつとなる農夫
凍てる夜は靴音ばかり冴えてくる
着ぶくれて後ろ姿の老いにけり
襟巻きに顔を埋めている少女
襟巻きに少女は夢をたくしけり
雪おろす誰もうしろの山を見ず
枯れきつて空何ごとくも無かりけり
蓮の葉が動くとき来て皆動く
故里は遠くにありて大枯野

北風が吹き抜けてゆく晩年期
囲炉裏の火とろとろ民話生まれくる
考える顔がいくつもある師走
マスクして女は本音吐かぬかな
紙漉女生涯水と縁切れず
雪深き秘境も春は遠からず
寒い夜はひとりぼっちの灯を点す
白雪が山の眠りを深くする
雪深し鴉も山をはなれけり
雪やんで鴉ばかりが増えてくる
裏方のその後は知らず寒椿
寒椿いつも力んでいる仁王
人形も浮き立つ春が近いから
北風にさらされていゝ大樺
寒鴉啼かず東京生まれかも
寒林の奥からつづく獣径
藁塚も男も孤独かも知れぬ
声出さば枯木も芽吹くかも知れぬ
つけまつけ枯野に落ちている不思議
流れない川の向うにある夕日

北風に鉄塔高くそびえお
ぶらんこは空から先に動き出す
大寒の入り人形は声立てず
寒風にとり残されている木馬
雪にさらす仏の腫蒼かりき
冬銀河地球を孤独にしてしま
聡明な少年といて鷹の空
何ごとも無くて枯野は残りけり
藁塚は農夫の顔として残る
深雪の秘境に遊ぶ鳥けもの
火を焚けば仲間ばかりが寄つてくる
あともどり出来ぬこの世を轡落つ
戦の無い気安さ鴉子をなせり
冬日浴び納得のいかぬこと多し
海底に冬の水母は眠るかな
雪やんで月は光を弾ませる
涸川を獣のように渡りけり
凍蝶のいのち強きに舌を巻く
温め酒独り暮しの気安けり
ポケットに小銭ばかりのある冬日

冬帽も飾りの一つ女老ゆ
冬木に瘤女は持たぬ喉仏
冬ざれや女は髪を乱しおり
冬耕す農夫の背なにある齢
冬山を登れば見えてくる故郷
老いてなお指定席のない枯野
寒鴉啼きたくなれば街に出る
寒しじみ明日の夢も無く煮らる
北風にさらされ明日の無い男
泉岳寺に雪降り明日を考える
ひとりぼっちの暮らしの中の寒しじみ
駅伝のしんがりが過ぎ禁火消す
非常口あるかも知れぬ大枯野
懐手していて晩年見えてくる
キリストも釈迦も知らざる寒椿
人も木もいつかは燃えるときがくる
冬ざれや男にもある泣き黒子
冬帽子目深に過去が遠くなる
枯れきつてしまえば近くなる山河
京の冬鴉ばかりが目立ちけり

死は孤独森の鴉の寒い声
手のひらに風花消えてゆく定め
古曆めくれば遠くなる山河
着ぶくれて為すこと何も無かりけり
透明になるまで冬日浴びている
寒々と水壺の水動き出す
白鳥はいつも納得して泳ぐ
死に急ぐにはあらねども椿落つ
涸れきつて雪解の刻を待つ大河
凍蝶の光求めている晩年
剥製の鷹の眼光失わず
誰も知らぬ深山の雪崩音
梅の香がほのかに闇を透けてくる
冬満月男を駄目にしてしまふ
牡丹雪いつもゆつくり落ちてくる
ボンのくぼ寒し枯野に誰もいず
風邪引いて喉飴嚙んでいる時間
寒風に刃物を研いている男
花落ちて夢失いし寒椿
梅林を濡らせし雨も晴れにけり

北風に吹き飛ばされそうな星座
梅林に握り拳のある古木
梅焼酎飲み何ごとにも無かりけり
暗い影あるから冬を耕せり
山眠り人に永遠の眠りあり
器用さに溺れいちにち浮寝鳥
吉凶にかかわりもなく鷹の空
マスクしてイヤリングのみ目立ちけり
冬銀河この世の終りくるときも
うすれゆく愛寒雷を聞きしより
寒い夜は白磁の壺を抱いて寝る
ささらぎの空の碧きを知らぬ人
雪嶺は遙かにありてサーカス来る
火を焚いて村の噂を埋めてゆく
目刺し焼き明日のことは考えず
枯山を残して温む鳥けもの
寒林を採す秘宝が欲しくなり
冬漬けにどかつと大きな石を置く
この橋を渡りて春がやつてくる
枯木立賢者のごとく鴉いる

梅林にいろいろな人出入りする
冬菰食べれ春が見えてくる
雪降つてまた遠くなる故郷かな
雪女妊娠れば春近くなる
妊りて帰る家なき雪女郎
寒椿女は覚めていたりけり
梅林にいちどは燃えることがある
晩年が見えてゆつくり日向ぼこ
独楽廻しついに後ろを振り向かず
北風の吹くたび遠くなる戦後
粗莖ひろげ冬日を浴びている
夕焼けの空を残して寒鴉
埴輪の兵皆身構えている冬日
水涸れて大河も不倫の底さらす
凍蝶のその後は知らず日暮れけり
しんしんと雪降り遠くなる山河
大樺枯れて十年たちけり
冬鷗あしたは旅の役者かも
癌細胞冬日のなかで疼くかな
あやとりの糸がもつれている寒さ

頬被り外せば見えてくる故郷
流水期尻に敷かれていた男
人間臭い街吹き抜ける空つ風
志高きにあらず寒鴉
世辞言わず言葉短き寒の人
壺の耳いよいよ冷えている寒夜
ゴッホの耳が疼いている枯野
吉凶にかかわりもなき空つ風
雪降りて故里の空明るくす
枯岬女は身投げ許されず
振り向いてみても枯野は枯野かな
寒椿落ちてても地球無表情
村中がゆたかになりて農継がず
壺の耳一つが欠けている寒さ
透明になるまで寒風にさらされる
きさらぎの空が明るい喪中かな
すすき野は筋書き通りに枯れけり
死神に覗かれていた寒い家
火を消して消えない噂一つあり
薄氷を踏まねば母に逢えぬかも

鉄棒の空を逆さに覗く春
頬被りしていて嘘など伝えぬ男
枯野きて誰にもあわず黄昏れる
何ごともなくて枯野をよぎりけり
寒い顔して鏡の中にいる女
日脚伸び女は子供背負いゆく
胃カメラの先が探している枯木
着ぶくれているから背中まるくなる
優しさが邪魔して雪女にはなれず
冬夕焼け団地の裏にある墓場
髭剃つて寒風の街抜けてくる
牡丹雪降るたびまるくなる大地
冬ざれて湖北は墨絵に似てきたり
浮寝鳥山の後ろに湖ありて
寒風が吹くたび夢が遠くなる
何ごとにも人任せなり日脚伸び
手をあげるだけの別れか落椿
世捨人とは云うには遠し寒椿
肩書きが無いから身軽になる枯野
梅林に流転の月日ありにけり

突つ張つて冬木のように老いゆくや
蓮の葉が枯れて満身創痍たり
裸木になれば鴉が啼きにくる
枯野きて目鼻淋しくなることも
冬ざれや瞳を入れる人形師
腹割つて話をつめる結氷期
冬銀河少年の夢遠くして
生きるだけ生きて時効のない冬日
天の声地の声遠し寒椿
筋書き通りにぬかぬこの世を大雪崩
三面鏡覗いてみても寒い空
何もせぬ男が増える流永期
凍蝶は春の近きを知っている
機を織り古い女として生きる
忘れたいことは忘れずに大枯野
鮫鰈の八つ裂きにあう真昼間
せんかたも無きこの寒さ古都眠る
日脚伸び都は古き寺多く
日溜りは湖にもありて浮寝鳥
人間臭い街を遙かに雪崩けり

炬燵の中で放浪記読んでいる
どんど焼く煙にむせている男
妊りし女がひとり牡丹雪
肘張つてみても冬木にもなれず
水鳥はゆるい流れに身をまかす
リズムにのり冬木にもある呼吸音
はるばると来て白鳥は泳ぐかな
ポケットに小銭を探す一葉忌
枯れし野に一つの過去となる詩篇
白鳥がきてから湖が明るくなる
海女の子の海女にはならず卒業期
無表情な枯野の果ての流れかな
世の中は変つてゆけど麦を踏む
雪積もり山間の村に人あふれ
焚火消え噂の一つ残りけり
死神の手のひらにある齢かな
筋書きをかえねば春が遠くなる
白鳥はただひたすらに泳ぐかな
いつせいに麦踏み後ろ振り向かず
肩書きが無いからひたすら麦を踏む

寒灯の真下で民話聞いている
枯枝に赤い目印ぶらさげる
寒椿手のひらにあり軽からず
寒梅の匂いは闇に漂えり
流水のとりまく島に灯が点る
寒灯の薄暗がりて書く自伝
師の影は踏まず枯野の月明り
水鳥の流されてゆく暖かさ
肘張つて冬木にもある呼吸音
肘張つて人も枯木の形なす
雪降るや鳥も獣も姿なく
冬木立ゆくえ不明の子がひとり
寒風のリズムで森が暗くなる
不忍池に水鳥あつまれり
枯れきつて森を色どる鴉かな
大冬木臍も拳もあらわかな
補聴器で冬木の呼吸聞いている
冬山の懐ふかく鳥けもの
ゆりかもめ生涯波にもまれけり
日向ぼこしていつのち枯れてゆく

己が愛確かめてみるとろろ汁
夕茜旅の終りの枯野ゆく
雪深き故里なれど戸惑わず
仁王の足が重たい寒の入
寒の入り骨の随まできしむ夜
冬日浴びとろりと睡くなる時刻
決断は女にも欲し寒椿
雪原に踊るは鶴の夫婦かな
てのひらに何も無けれど鶴が舞う
煮凝りのふるえやまざる僧の家
肩書きが無いからバラには刺がある
寒椿触れなば落つやも知れず
髭剃つて冬日を浴びている日曜
石投げて冬の夕日を遠くする
志ひめて枯野をゆくひとり
ひるがえせば手のひらとなる寒の空
寒灯を点してから女の顔
寒月光己の影が重くなる
きなくさき話も出たり寒の明け
寒風を背で受け齡失わず

暖房の効き過ぎ酔が急にくる
故里の山の目覚めは遅かりき
枯れ木立木の瘤ばかり目立ちけり
手毬つくリズムが村をたいらにす
音のない不安寒灯点される
不器用に生き涸れ川で顔洗う
花八つ手人には云えぬことがある
縄電車置き忘られている枯野
冬景色にあわないう橋は塗りかえる
飴色になるまで枯野に立つている
シナリオが無いから風に舞う落葉
村中の鴉が寄つてくる冬木
死者だけが通る枯野かも知れぬ
囲炉裏辺の民話の里に消えし母
柩出てこの世の無常知る雪夜
椅子一つ置かれ公園の寒い空
剥製になつても鷹の目はきつい
雪吊りが解かれていても春はまだ
冬山に切り株ばかり残りけり
音もなく雪の積もつてゆく故郷

冬野 ゆく終着駅のない列車
白鳥にとりのこされている湖面
きわまれば立つかも知れぬ寒卵
白鳥の泳ぐ湖にもある愁い
月夜かと思ふ玻璃戸の雪明り
足音は遠くにありて春いまだ
春いまだごとりと水をまるく呑む
藁塚が小さくなつてゆく故郷
牡丹雪ゆつくり地球うごくかな
雪見酒に酔うこともあり独り暮し
労多きことのみありて根深汁
刃物研ぐ空青々と寒に入る
根深汁あしたのことは考えず
雪の日の女は無口になつてゐる
肩書きが無いから髭をたくわえる
ちちははに似て藁塚に温みあり
寒椿 女は軍歌口にせず
夜汽車着く一窓一窓にある寒さ
枯れ急ぐものに明日はありにけり
山枯れて血縁うすれゆく故郷

生臭い話が話題となる囲炉裏
音もなく降り積む雪は深かりき
耳うらに噂とどめておく寒夜
冬日和喪服の似合う女かな
冬の月踏切り一つ越えてゆく
梅林に己れのいのち忘れおり
はかりごと密なるがよし寒椿
寒灯に化粧のくずれ直しおり
寒灯下世のからくりを考える
寒風にさらされている壺の耳
曲つても曲つても故里は雪
大枯野臍も涙もなかりけり
身の門外せば寒気どつとくる
着ぶくれていて昼日浴びてゐる
浪々と背中が寒くなる齡
風花のひらひらひらと花時計
諦も悟りの一つか懐手
お互の過去には触れず温め酒
着ぶかれて己れの影を忘れおり
駅伝の過ぎたる後は寒い村

父のもの着ていて寒い村にいる
寒林を抜けて光の中に出る
能登の海荒れて日暮れが急にくる
合鍵のあわない枯野にいてひとり
北海の潮の匂いの蟹届く
引出しの奥で疼いている手毬
来し方は苦しみ多く木瓜の花
薄ぐらき山河のありて冬ざる
街角の夜が冷たい占師
その先は怒濤の海ぞ冬岬
冬蝶は小さき川を越えられず
あやとりの指一本がこごえけり
くらがりにいる越前の雪女郎
凍空へ響く女の靴の音
正直に生き冬耕に精を出す
重い影曳いて晩年枯野ゆく
獣棲む山野を埋めて雪つもる
鼻のふくみ鳴く夜は罪深し
放浪の顔がならんでいる焚火
死に急ぐにはあらざれど春の雪

耳だけが大きく見える寒の明け
寒林を抜けて流れにつき当る
麦を踏むいちにち青い空の下
一月が過ぎれば喪明けが近くなる
水鳥の羽音が闇を深くする
浮寝鳥この世の掟など知らず
寒風の真只中の石仏
月光のさむざむとある無人駅
大空に何もなければ寒鴉
寒林につぶやく声の聞こえる
てのひらに何も無けれど寒の月
雪の夜は兄弟姉妹語りあう
降りしきる雪にいのちを落しけり
無人駅の時計が寒い刻きさむ
寒灯の薄暗がり占師
寒椿不敵な音を立てて落つ
恵方なきふたりに冴える冬銀河
北風を背中で聞いている仏
うらおもて無き晩年を冬銀河
おとこ坂登れば雪嶺見えてくる

寒風が骨身にこたえてくる晩年
一徹の老いの拳のある冬木
埋もれ火を掘れば昔が見えてくる
真夜中の居酒屋寒い椅子ならぶ
冬夕焼け山の向うは故里ぞ
指の先ここへえる村の行事かな
暖房の効き過ぎ花札きつてゐる
冬天は知らず木馬は廻るかな
蓮根掘る泥にも深さありにけり
雪女矢つ張り影はなかりけり
鏡中に寒灯一つ点りおり
降りしきる雪に一族滅びたり
枯れきつて終着駅のない切符
故里を遠くにはこぶ虎落笛
花時計埋もる牡丹雪が降り
雪解水流れの果てにある大河
齒車の音噛み合はぬ寒さかな
たえてゐることにも限度ある冬木
寒林を抜け手のひらにある骰子
断ちきれぬ不安荒野の冬銀河

雪女くるかも知れぬ暗い夜
雪深き山の向うにある怠惰
枯れ果てて女の憩う場所がない
冬山に登るも女の意地ならむ
大枯野火繩の匂いする真昼
水涸れて大河に何もなかりけり
存分に走りまわつてゐる枯野
白鳥のはなれし湖が暮れのこる
凍てきびし研石に鉄の匂いして
山の音山に戻せば山眠る
近づけば何ごともしなき梅林
白骨を捨てる枯野の真中で
降る雪にいよいよ高し天守閣
枯れきつて墓の後ろにあるしじま
奇術師の去りたる後の冬の空
寒灯下古書をひもとく男かな
雪深き村に残りし乳兄弟
大枯野行けば出口が見えてくる
手のひらに何も無けれど落椿
滅びゆくもの暖めて冬座敷

切株の一つ一つにある冬日
雪深く過去も未来もなき秘境
白磁の壺に温みのある冬日
冬日浴び再び鼓動する大野
マスクしていても揺れてるイヤリング
大マスクして看護婦の指細し
雪の日の女は固く口を閉づ
雪見酒炬燵の中で呑むことも
歴史書の末尾が濡れてしぐれけり
どの山も雪をかむりて日暮れけり
雪だるま夜は孤独にならされる
白磁の壺も割れるか寒の入り
藁塚を数えて貧し甲斐信濃
冬空に気球が一つゆれてゐる
冬山に男ばかりが残される
集落の灯暗き真冬かな
冬山の枯れとどめる術はなし
器用さに溺れ枯野ゆくひとり
降る雪が明日の夢を埋めけり
寒の入りを洗えば顔凍てる

肘張つて人も冬木の形なす
水鳥の羽ばたき水をたかぶらす
鳥獣雪の秘境を尋ねくる
枯れきつて故里の森暗きかな
主のいない冬木一本だけの家
暖冬の空がふくらむ少年期
枯れるもの枯れきつてから動き出す
枯れきつて大地の呼吸乱れけり
ポケットに何も無けれど風さむし
寒風のリズムで森を塗りかえる
石段にリズム生まれてくる寒さ
冬木の瘤いつかは疼くことのあり
いちにちじゆう光あつてゐる冬木
水鳥が来ていて沼も活気付く
生傷のあらわとなりし大冬木
流れない川を水鳥はなれけり
したたかに生きて冬木になることも
日向ぼこして恍惚になることも
むなしさもこの世の定め寒椿
村中の冬木が聞き耳立ててゐる